The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世大阪の繪畫
Author(s)	稲束, 猛
Citation	懐徳. 1925, 3, p. 20-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近世大阪の繪畫

稻東　猛

先年懷德堂に於いて大阪の町人學者といふ題の下に諸先生の御講演があつたが、私はこれから大阪に居た民間の畫家、即ち藝術方面の事に就いて少しく御話しを申上げ樣と思ふ。

大阪の藝術を論ずるには自然に都市としての大阪の發達と關聯して見なければならぬ。古い時代の事は別として、近世にあつては秀吉が大阪に築城したことが大阪の發達に重大なる關係のあつたことは勿論である。爾來商工業の都市として漸次に發達し來つて遂に今日の盛大を成すに至つたものであるが、都市としての發達が一面には藝術的方面にも尠からぬ交渉を有することは看過してはならぬ。

傳ふる所に據ると大阪城内の襖繪には狩野探幽筆の水墨の山水、四季耕作、杉戸の鶯籠、雨中の鷺、水呑の虎などの諸圖があつたと云ふことであるが、惜いかな此等の藝術上の諸名品も今日には傳つて居りません。唯この事實によつて私は當時の大阪に於ては技倆なり地位、閲歷の上から言つて探幽に匹敵し得る程の畫家の居なかつた事を想像するのであります。探幽歿後と雖も久しい間、大阪の地は繪畫の方面に就いて聞ゆる所がなかつた。

所が德川時代の後期。享保の頃になつて橘守國その子、保國、小柴守直（探春齋）などの人々が先づ現はれてゐる。そして此等の人々は探幽の系統ではなくて、京狩野と並稱された京都の鶴澤探山の門人であつた。就中橘守國は板畫の名家であつた。これ等の人は享保元文寛延寶曆の頃に亘つて唐土訓蒙圖彙、唐土名所圖會其の他多くの畫本を出してゐる。併しその肉筆の方では彼等の傑作と云ふ程の作品に未だ接しない。この守國と時代を同くして大岡春卜が居つた。別に師匠に就かなかつたが矢張り狩野派の繪畫を善くした。

その遺作は大阪並に其附近の舊家等には往々所藏されてゐる。作家として重要なる地位を占めて居る譯ではないが、守國と同じく畫鑑類の著述で有名である。中にも書巧潛覽六卷は注意すべき著述であつて、その卷二に論じた十體畫法、即ち物人を描いて其衣紋の描法に錐畫點、闇斜點、遲速點、急波點、岫雲點、正鋒點、暗過點、禿筆點、顯露點、南路點の十點を揭げてゐるが、所謂る人物の十八描法などとは全く異つた分類法であつて、後に櫻井雪館がその著畫則に於て彼の十體畫法を批評して自己一流の名稱を下してゐると攻擊した如く、其獨斷的の態度は丁度その畫が別に師事することなくして狩野派の畫を善くしたのと同じ行き方であつたのである。

春卜に稍遲れて狩野風の畫をよくした者に月岡雪鼎がある。この人は高田敬輔の門人である。敬輔は京狩野の永納の子永敬に學んだ人で、兼ねて雪舟等の畫風をも加へ、筆力の遒勁な男性的氣象の現はれた繪畫を善くしたが、之れに反して其門から出た雪鼎は反て美人畫に巧みで、好んで題材を伊勢物語中に採つた。そこで近世繪畫史等には全く卑俗なる浮世繪であるかの如く書かれてあるが、併しこれを當時の宮川長春、鈴木春信、西川裕信等の作品と比較して仔細に觀察すると、同じく美人畫ではあるが雪鼎の作品には彼等の樣に粹な所がない。容貌姿態にも尙生硬な所があるが、併し其處に又却て品位の勝れるものがある樣である。所が一度男性の人物畫を描く段になると、容貌衣紋等全然本來の狩野派の筆致に從つてゐて、流石に其系統の作家たること爭はれない。

雪鼎の門人中注意すべきは墨江武禪と蔀關月の二人である。武禪は山水畫家であるがその經歷は餘程風變りな人であつた。傳に依れば此人は最初船乘りであつたが志を發して雪鼎に學び、後には雪舟風の古畫を慕ひその描く所も雪舟張りの强い焦墨の線で岩石なり樹木なりを寫してゐるのはその特色であるが、唯その構圖の蕪雜といふことはその缺點といふべきである。然し乍ら北畫風の山水畫を描いては武禪が大阪に於ける第一人者であつたことは爭はれない。武禪は會心の作が成ると酒を飲み詩を吟じて自ら樂んださうで、遂に終

身娶らなかつたといふ畸人であつた。

武禪がその師と方向を異にしてゐたに反して部關月はその畫風といひ性格といひ雪鼎の後繼者たるに相應はしい人である。關月は山水、人物、花鳥の各方面に亘つて作品を遺して居るが必ずしも狩野派のみを墨守してゐなかつた樣で、或は當時京都の圓山應擧などの寫生風の影響を蒙つたか若しくは時代の一般風潮でもあつたのか草花等を寫實的に描いてゐるものが存してゐる。又この關月の特色とも思はれるのは山水、人物等に寒色を多く用ゐた爲か一種悽愴の氣分の漂ふてゐることである。實際關月は天明寛政の大阪の畫壇にあつて狩野派の畫を能くした代表的人物である。又關月は中井竹山先生の知遇を受けてゐた關係もあつて懷德堂書院の襖に聖賢の畫を描いてゐる。その他關月の畫に竹山先生の賛せられたものが尠くはない等、この兩者の關係は餘程密接であつたらしい。そしてこの關月は守國春卜と同じく畫鑑類に筆を染めて亦多くの名所圖會を殘して居る。

關月の門下に中井藍江が出た。多く人物花鳥を描いたがその畫風には最早狩野派といふ所が餘程少くなつて來て、その代りに應擧以後の京都の寫生畫の筆致と申したいが、實は嚴格にいふと、それとも少し違ひますが兎に角寫生的の分子が多分に現はれた畫を描いて居る。この人は儕山先生に師事したと傳へられてゐるがそれ等の關係のあつてか、懷德堂並に水哉館の諸先生と親交があつた。藍江の畫に中井柚園先生の賛したもの等がある。

林文波は藍江に學んで更にその寫眞味が加はつてゐる。この人に就て注意すべきことは彼の先輩が懷德堂や水哉館の諸先生に於ける如く陽明學派の大鹽中齋先生の愛顧を受けてゐたことである、されば文波の作に中齋先生の賛あるものは屢々見受けられる。殊に中齋門下生であつた河内國深尾氏の舊藏に係る文波の作の王陽明先生畫像がある、（現今森下博氏所藏）上に王陽明先生を祭る文を長々と中齋が書いてゐる。この一幅の如きは以て彼と中齋先生との關係の深かつたことを窺ふに足りるものである。尙中齋先生には陽明先生

畫像を田能村竹田に依頼して描かしめたものがあつたらしいが今は何處にあるか判然しない。

以上は大阪に於ける狩野派の消長の大概であるが、次に注意すべきは南畫系の人々である。

大阪の南畫は或は嚴格に言へば南畫文人畫と稱すべきであらうが、此方面で先づ起つたものは何れも池野大雅の流を汲んでゐる。福原五岳、木村兼葭堂等がそれである。五岳は純然たる南畫家であつたが兼葭堂は文人畫家である。兼葭堂に就ては西村先生の御研究もあつたが、この人は餘暇に繪畫をやつた人である。近世繪畫史には畫家として特にいふべきほどの技倆はあることなしと言つてゐるが實際は決してさうでない。その作品の一見素人らしく巧妙ならざる點が、實は反て彼の眞に文人畫家たる所以である。その山水畫に至りては流石大雅堂に學んだだけに、その落欵を蔽へば殆んど大雅堂かと思はれる樣な作品がある。それでは全然大雅堂の模倣かと思ふと。今日此處に掲げた古木竹石圖の如き作品もあつて强ちさうではなかつた。然し餘程大雅堂には私淑してゐたのであつて。大雅堂の年譜などをも作つてゐる。要するに天分の高かつたのと收藏の豐富なのとに因りて爲すとして可ならざるは無かつた有樣である。以前東京で發行されて居た畫斷といふ雜誌に、畫家を三等に分けてその第一流に兼葭堂の名を錄してゐるのは吾が意を得たるものである。この人はその好尙と資產とに任せて、內外の書畫典籍金石等を多く蒐集收藏して、之を以て斯道を啓發したことも多く、殊に明の沈顥の畫塵を覆刻したり、或は友人の桑山玉洲（紀伊人、大雅堂門人）の歿後その遺著繪事鄙言を上梓したりして、藝術上の名著を世間に紹介した功績は沒却することは出來ない。

文人畫家として取扱つては少し大袈裟に聞ゐるが兼葭堂以前にあつて、讀書、著述の餘暇、繪事に親しみ時に見る可き作品を殘した人が尠くない。五井蘭洲先生には墨竹墨蘭などの遺作がある。昨年懷德堂紀念祭の折、參拜者に頒つた扇面の墨竹（神戸川越氏所藏）の如きその一例である。竹山先生も稀に畫筆をとられたと見ゐ此處に掲げた小品（蟷螂、双六盤圖）がある。併し此方面では竹山先生よりも履軒先生の方が遙かに優れてゐる。私の見た範圍では四君子、壽老位のものであるが、流石に一代の儒者が餘暇興に乘じて筆を遣ら

れただけに、書卷の氣が畫面に活躍して居るのを感じる。何人に就て畫を習はれたかは不明であるが、その書畫を見れば直ちに其人に接するの思ひがある。即ちこゝに掲げた壽老人圖の如き履軒先生の風采を髣髴たらしめるものである。かゝる點に於て皆川淇園、細井平洲などの作品と其の趣きが似て居る。要するに何れも文人畫に屬するものである。

兼葭堂と共に大雅の門人であつた五岳は備後尾道の人であつたが大阪に住んだ、山水人物畫家である。私が見たこの人の作品では山水にしても人物殊に彼の得意と稱せられてゐる支那美人畫にしても生硬と評すべき作品が多いのでその眞に敬服すべき作品には未だ出會つて居ない。

五岳の門下では岡熊嶽、林閬苑、濱田杏堂などの人々聞えてゐる。熊嶽は山水畫をよくした。その米點を以て近畿の山水を描いたものなどには見る可きものがある。彼は平素自分の青綠山水を本當に了解して呉れる者は菅井梅關より外にないと豪語してゐたと云ふが、梅關とは仙臺の人で當時長崎に清人江稼圃が來てゐると聞いて、畫を習ふ爲に態々長崎へ留學した人である。この人がその往復の途中大阪を通過して而も暫く滯在してゐたことは文政六年の浪華金襴集によりて知られる。梅關は畫界の新傾向を知り長崎歸りといふので當時持て囃されて居たのである。熊嶽と彼との交際も無論その間の事であるが熊嶽の自負した程度も右の言によつて知られるのである。實際梅關の青綠山水は當時の南畫家の中では餘程支那人に近い所があつた。言ひ換へれば元末の畫家を尊崇した清初の大家の着色法、即ち青綠でも一種清淡な青綠を喜んだ樣な傾向から感化を受けて居る。熊嶽が心掛けた着色法も矢張りそこにあつたのである。

林閬苑は世にあまり喧傳されず又繪畫史上にも深く注意を拂はれてゐないが、私は相當に注意すべき畫家であると思ふ。畫乘要略に據れば閬苑は泉州堺の名家にあつた明畫等の摸寫をして大に技倆を上げたとあるが、今その遺作に就いて考へてゐるといかにもと首肯される點がある。昨年大阪文化展覽會の際呑秋山水雙幅（水野彌兵衛氏所藏）が出陳されてゐたが、彼の幅は閬苑の代表作といつてもよい。就中その春の幅の點法

等は彼が大雅堂の山水の筆致を如何に會得してゐたかといふことを偲ばせるに足りる。その他圓苑には元の黄大癡等に私淑してゐたと思はれる披麻皴の山水畫等もある。兎に角私の考ふる所では、大阪に於ては半江以前唯一の山水畫家と思ふ。啻に山水畫に止まらず人物畫になつても非常に立派な特色のある作品が遺つてゐる。大阪或は泉州の舊家には往々彼の傑作の所藏されてゐるのを發見するが、此等の作品を仔細に吟味して行つたならば、單に大阪の南畫界だけに止らず、或は日本の南畫史の上からも相當注意すべき地位を占むる畫家であるかと思はれる。五岳の門に鼎春嶽といふ人があつた。この人は古畫の臨寫に力めたといふことである。

濱田杏堂は醫を業としたが傍らこの道にいそしんだ人で、その描ける四君子、古木竹石等の類には讀書人らしき一種超越的氣分を有してゐる。

尙叙上の人々と前後して十時梅厓、岡田米山人が出てゐる。梅厓も矢張讀書人で繪畫をよくしたが、一方又書を趙陶齋に學んだ人で、書の方がむしろ畫よりも優れてゐた。その畫は一時興を遣つたといふ類の粗笨なものが多いが、山水畫に於いては元人の蕭疎な所を喜んだのは兼葭堂などと似て居る。

米山人に就ては彼の知遇を受けた田能村竹田の師友畫錄の記事が比較的詳かである。之れに據ると最初米屋渡世であつて躬ら米踏みもやつてその傍ら讀書したといふ樣に傳へられて居る。米山人の號も之に因つたもので彼の素養も亦この時代に成つたのである。長じて伊勢の藤堂家に仕て書記となつたが、晩年致仕して專ら畫家としての生活に入り優遊餘生を樂んだ樣である。この人は中井履軒先生と親しかつたといふ。履軒先生は狷介不屈容易に人に許さなかつた質であるが不思議に米山人とは意氣投合する點のあつたと見え、嘗て履軒先生が華胥國王（履軒自稱）親製の墨に其墨色を誇つた竹葉書きの五絕を贈つたに對して。米山人も亦得意の清淡高逸の五絕を以て之に和韻したといふことである。又彼は紀玉堂（浦上春琴の父）とも親くその年齡、その作畫の飄逸なる點も兩者はよく似てゐたのである。此等の事は彼が當時の識者に如何に認められ

てゐたかを知り得るものである。

竹田の壯年、生玉の持明院に寓してゐた頃は屢々米山人の敎を請けた樣で彼自らも知遇淺からず云々と云つてゐる。その竹田の傳ふる所に據ると米山人は性質和易、少しも物に忤はなかつた人の樣であつて、寔に豁達洒落頗る樂天的の人らしかつた。

嘗て

生計不關水旱愁。耕芸託在一毫頭。
千畝紙田無賦稅。滿山豐雨自家秋。

と謌つてゐるがよく畫家の生活を表はしてゐる。

この人の畫はその師承が明かでない。その經歷から考ふれば相當後の事らしくもある。竹田は元の黃大癡を學んだと言つてゐるが、大癡の眞蹟は中々得られない。畫傳畫譜によるの外はなかつた。然るに米山人の作のあるものは黃大癡を狙つた淸初の王時敏の畫と酷似した點がある。是れは不思議な樣であるが當時已に交通の要路にあつた大阪には長崎の事情が早く知り得られて支那文物の吸收に便であつたこと、十時梅厓、菅井梅關等の新智識が大阪に關係あつたこと木村蒹葭堂の豐富な收藏等によつて、米山人の作品のあるものがこれらの刺激によつて影響を蒙つた點のあることは否み得ないと思ふ。

併しその本來の作品は竹田が師友畫錄に似拙而古。似疎而厚。渾朴深潤といひ、又山中人饒舌に書畫俱不甚巧。然卒然天趣從肺腑出と言つてゐるのはよく彼の特色を言ひ表はしてゐる。彼は主として山水畫を、稀に花鳥人物を描いたが概して主觀を重んじて皴法などに一種の癖があるが、一面黃大癡を學んだと云ふ披麻皴の山水等には甚だ穩健なものがある。そしてこれが後年その子半江に依つて大成されたのである。

半江は幼少より銳敏の資で夙に十一、二歲の頃既に畫を善くしたことは小米と落欵した素朴な山水畫や、梅の樹等の遺作を見たことがある。父に從つて伊勢に在つた頃には月仙に習つた。十四歲の頃の作品に半江と

月仙との關係を物語るものがある。長じて又藤堂家に仕へたが父を喪つて後妻も亦歿したので、文政五年四十一歳の時致仕して大阪へ來た。この時頼山陽が彼の辭職を賀するの七絶を賦してゐる。爾來大阪天滿の寒山寺の傍に住んで、寒山外史と自稱してゐた。文政六年の浪華金襴集には半江の箇所に儒學書畫とあるが、彼の主なる部分は畫にあつたらしい。

彼と親交のあつたのは篠崎小竹、大鹽中齋、八木巽所、鼎金城、森川竹窓等がある。又竹田はその大阪に來る毎に往來してゐたので米山人以來の益友であつた。半江の事蹟の詳かなのは實に竹田の師友畫錄、小竹齋詩鈔等に據るのである。即ち之等に據ると半江の家には米山人以來蒐集した書畫典籍の類が非常に豐富であつたのみならず、頼山陽を初め交友の間に參考すべき作品のあると借覽を怠らなかつたことを物語る記錄が屢々見受けられるので、生來の天禀の才に加ふるに斯く努力研究した爲に遂に我が南畫界の屈指の大家となつたものであらう。

一体繪畫に限らず學問の方でもその源を支那に發した事柄で、本當の意味に於て支那人と伍して些の遜色もないといふことは至難の常に屬する。南畫の方に於ける大雅蕪村竹田及び我が半江の如きはこの點から言つて我南畫界屈指の作家と謂ふ可きである。

然るにその在世當時にはその作の高尚なのが時俗に歡はれず、非常に苦しい生活をしてゐたらしい。殊に天保七年より九年にかけては饑饉があつたり大鹽騷動があつたりして、大阪はわけて騷擾したので九年頃から十二年頃まで攝津の住吉に移つて同地の社家に關係して且つ躬ら耕して糊口の計を立てゝゐた。住吉畫卷以下多くの傑作は實に此間に成つたのである。彼は晩年咽喉を病んで漸次聲が出なくなつたので無聲、田啞父などの印を用ゐてその書屋を無聲書屋と謂つてゐた、かくて弘化三年六十五歳で歿してゐる。

さて彼の作品を通觀してみると、小米時代より冲澹洒脫の晩年の作品に至るまで不斷の進歩は認められるが、その所謂墨江客舍の時代は彼の藝術的最高潮期と考へられる。その價値は三都九州を通じて一流南畫家

の一人であること勿論である。彼の住吉畫卷（上野精一氏藏）水墨米法山水（岩本榮之助氏舊藏）等その主なる代表作である。

畫題は山水が主で花鳥も描き稀には人物畫をも描いてゐる。そして山水はその最も得意とする所で晴嵐即ち乾燥した自然を寫すには多く披麻皴を用ゐ、雨前雨後等の濕潤の氣を帶びた山水には好んで米法山水に依つてゐる。皴法の山水は米山人も屢々試みた所であるが半江に至つては清初大家の作の影響を受けて構圖用筆の點に於て米山人の蔽を脱して一層整頓してゐる。唯その描く所が深遠圖高遠圖のみで平遠圖のないことは米、半父子の共通點で、亦兩者が海屋對山等と好對照をなしてゐる點である。

更に米法山水に至つては全く彼の獨創ともいふべき方面である。尤もその研究は當時米點研究家の執つた方法の如く畫傳畫譜よりして米元章、米友仁等の筆致に想到したことは勿論であるが、彼は尙ほ一歩を進めて近世清朝畫家の米點山水にも注意を懈らなかつたのである。中にも龔賢や張庚のこの種の作品に負ふ處の多かつたことは兩者を對照して何人も首肯し得る所であらう。

當時京都には中林竹洞が居つた。此人は熱心な米點山水の研究家であつたからその山水は折帶皴か若くは米點山水であつた。而も何れの作品も同種の構圖であつて單調の譏は免れない。尤も彼一流の見識からかゝる工夫を凝したものであつたが、之を半江の輕快洒脫に雲霧と峯巒との變化を盡して濕潤の有樣を墨色の濃淡を用ゐて極めて巧妙に寫してゐるに比較すべくもない。かゝる意味から强いて半江の好敵手を索むれば纎かに關東の寫山樓谷文晁がある位である。

又その花鳥畫は、二十歲時代の牡丹や薔薇等には在來の日本で周之冕といつた風の艶麗な彩色を施したのを見ることがあるが晩年に至つては南畫系統の墨畫の澁味のあるものを好んで描いて居る。明の沈仕（青門山人と號す）の花鳥等は彼の喜んだものゝ一である。往々にして句描法を用ゐた。梅逸の巧妙達者はないが又彼の如く輕薄ではない。竹洞の鈍重がなく又枯燥の感を與へないものであつた。要するに彼の花鳥畫は一見

素人畫の樣であるがよく味ふと氣韻含玄の豐富であつて容易に他の企及し難い性質のものである。

此他大阪には金子雪操、田能村直入等の居つたことを擧げることが出來るが何れも半江程の畫家ではない。

南畫は此位にして寫生派に論及しやう。是は圓山四條派の支流で森派、西山派である。森派は森狙仙から始つたものであるが、大阪と密接の關係を有するのはその義子で應擧の弟子であつた徹山からである。徹山は動物畫家として有名な人であるが、是はその師匠や義父の指導感化が然らしめたものであらう。

抑々我國に於ける動物畫には鳥羽僧正筆と傳へらるゝ禽獸畫卷（高山寺藏）が古くから名高い。それは全體が纖細遒勁な線を以て描かれた白描畫である。その線は輪廓を形成すると同時に又筋肉運動の方向をも示すといふ二の役目を兼ねてゐる。故に手法は簡素であるが、彼の鬪牛圖に見る樣な複雜な動物の活躍振りを善く寫してゐる。以來數百年間、この種の描法はそれが時に彩色を施されて白描であることには變化を生じても、その手法は畫界の一方に依然として勢力を有してゐた。

所が應擧以後の圓山派の動物畫になると、最早や鳥羽僧正風の影響は見ない。支那の院畫殊にその系統の南蘋派から非常な感化を受けてゐる。要するに近代圓山派の動物畫なるものは骨描のみして彩色を施さない古代の白描畫に對して皮毛の細を盡し彩色を施した沒骨畫の成立である。併し全然南蘋派となつたものでなくて南蘋派の强烈なる異國調から離れて別に獨立した日本風の清新な動物畫といふことが出來る。

徹山は實にかゝる方面に於て大阪畫壇の唯一の注意すべき作家である。その作品も狙仙が猿、鹿、直賢が鼠等の如き狹い範圍ではなく、鼠、猫、兎、猿、鹿、羊、牛馬、虎等より狐狸、豚、駱駝、象、熊等に及び從來日本畫家の多く描かざりしものに及んでゐる。今でこそ何ともないが當時では象や駱駝等は隨分珍しかつたから、こんなものを題材にした徹山或は蘆雪等は新な努力研究を要したものに相違なからう。徹山に就てこんな逸話がある。彼が或時駱駝の揮毫を望れた時、彼はその我意を得たるものなることを喜んだが、畫面が纔かに半切位では腕を揮ふの餘地もないとて嘆息したといふことである。

併しながら徹山等の動物畫家としての眞價は必しも對象の新奇を索めたと云ふ樣な皮想的なことではない。有りふれた在來のものを題材にして如何にこれを新く取扱つたかといふ問題である。

抑々圓山派の動物畫には毛筆を以て部分部分を精密に描く毛描きの法と刷毛を以て全體を概括的に掃觸した刷毛描きの法との二種ある。前者は從來存してゐたが、後者の刷毛描きは全く應擧以後の手法で且つ徹山などが殊に得意とした樣である。徹山が纔かに刷毛の一觸二觸によつて明暗凸凹鮮明なる動物形體を描出せしめ或は更に進んで動物が活躍せる狀をも巧に髣髴せしめた技倆に至つては確かに近世動物界の一異彩である。

徹山の義子に森一鳳があり。徹山よりは稍々遲れ、一鳳よりは稍前に西山芳園がある。一鳳と芳園とは大阪では大に珍重されて居る畫家で京都に至りては左程になく、東京に至つては殆んど知る者さへも稀である。是れその遺作の分布が東京知方に及んでゐなかつた外にこの作者の事蹟を傳ふ可き資料の缺乏も亦大なる關係を有してゐるが、一方又大阪ではこれらの人を重要視し過ぎてゐる傾向もないではない。

さて芳園一鳳の眞價は如何かと論じて見るにその遺作より考へれば矢張り山水畫家であつた樣である。一體圓山派は應擧歿後には完全に山水畫を描き得る者がなくなつて了つて山水畫と云はゞ四條派の獨舞臺になつてゐた。こんな具合で景文門下の芳園は勿論、圓山派の一鳳の如きもその山水畫は四條派の影響を蒙つてゐる。所が四條派の山水と云へば吳春以後多く郊外田園の光景を寫生するか、漁父樵者農夫等が自然の背景裡に悠々活動せる狀態に興趣を持つて。這裡に一種の情趣を生み出さうとするものであつた。彼の義童、豐彥、文麟、景文、芳園皆この系統である。芳園亦此の流れを汲んで而も多少の變化を見せたものである。

傳によると芳園は京都の景文に畫を習ひに行く、その途は大阪から三十石船で通つた。彼はこの舟中見聞の淀川沿岸等の景色及入洛して東山西山の風物を緻密に寫生したものであつた。大阪には彼の遺作が最も多く存してゐるが、此等に就て芳園の畫風を觀察すると寫實的の山水畫を以て四條派中一家をなせることを知

り得らるゝであらう。一鳳にも都名所の屏風（細川侯所藏）等もあるが淀川の實景を情趣ある筆致で畫にしてゐるのは芳園以前には得られない。これは丁度藤井竹外が高槻に住して淀川附近の自然を得意の七絶を以て漢詩に詠じてゐることに對照して誠に面白い。大阪の名所を繪にしたのも、この芳園の新しい試みが暗示となつて後輩を刺戟したこと多大である。彼の子完瑛、その他棠洲。其水、桃水など皆その餘風を受けてゐる。

近世に於て實景的山水畫に一生面を開いたものに關東では谷文晁がある。この人は白河樂翁侯の國防視察に隨行して邊陬を巡行したが當時の寫生が公餘探勝その他の畫卷となつて存してゐる。又この以後では北齋、廣重があつた。所が關西ではこの芳園が四條派の手法でかゝる傾向を有してゐたことは一寸注意に値することである。

實際芳園の作は一言にして申さば今日の所謂るスケッチである。然し四條派でよくやる刷毛でも使つて輕妙洒落にやることはせない。彼の神經質な性格は終始入念に筆を執り遠景の樹木でも之を胡椒點を以て組み上げ些の省略糊塗を行はなかつた。かゝる精密纖細なる點は彼の長所であると共に又短所であつて、その作品何れも雄壯といふことは望むことは出來ない。大作少くて小品が太だ多いことになつてゐる。併しこの纖細緻密の眞景山水は彼の以後連綿後繼者が相繼ぎ、今に至つて猶一部の人に喜ばれてゐる。

一鳳、完瑛の山水畫は芳園とは多少趣きを異にして彼程に緻密でないが同時にそれ程特色はない。元來西山派と云へば微細なものを描くに妙を得てゐる人が多い。即ち芳園完瑛の虫畫し。桃水の魚畫し殊にそのモロコ等の群泳の狀等は他の追隨を許さない點を有してゐる。

如上申上げたことを約言すると、近世に於ける大阪の畫家には狩野系の一派。南畫文人畫の一派、圓山四條系の一派の三派があつて、その中南畫文人畫の派と圓山四條系の派とには各聞えた人が多かつた。殊に南畫文人畫派に米山人半江の父子が大阪に居つて、當代三都長崎の畫界に嶄然頭角を拔いてゐたことは、大阪

の繪畫史上に特筆すべきことである。（畢）

天理人欲說の淵源につきて

懷德堂教授　松山直藏

天理人欲の說は、支那儒學の教說の上に於て、極めて重要なる位置を占め、殊に宋儒教說の中心を成せるものなり。而して其の說の出づるところ樂記に在り。然れども、其の思想の淵源するところは一般に大禹謨の人心惟危道心惟微に在りとせられ、三代以上の思想として、堯舜以來傳授相承するところのものなりと信ぜらる。尙書古文の僞を疑ふ朱子にして尙且つ然り。況んや其の他の儒者に於てをや。されど、淸朝に至るに及び、考證の學漸く盛んにして、經典につきても本文批判の風起り、尙書僞古文の辨明聚となり、大禹謨の如きは僞古文にして、人心惟危の四句は荀子解蔽篇に原きて僞作せるものなること明白となりたれば、今日に於ては、たゞ大禹謨に在りとの故を以て、三代以上の思想なりとは信ずること能はざるに至れり。今少しく樂記に見えたる天理人欲の說に就きて考査を試みんと欲す。

一、樂記の作者

天理人欲の說は、禮記の樂記篇に見ゆれば、天理人欲說の淵源を考ふるには、先づ樂記の作者に就きて考へざるべからず。然るに樂記の作者につきては、古來異說あり。第一は漢書藝文志の說にして

武帝ノ時。河間獻王與ニ毛生一。共ニ采リ周官及諸子ノ言ニ樂事ヲ者ヲ。以テ作ニ樂記ヲ。

と曰ひ、西漢の河間獻王と毛生との共に作るところにして、其の采るところは、周禮と諸子とに在りとなす。